出版物の推定販売金額の推移

出版科学研究所によれば、2006 年の取次ルートを経由した出版物の推定販売金額は、２兆 1525 億円と前年より 2.0%減少、2 年連続の前年割れとなった（出所:『出版月報07年1月号』）。

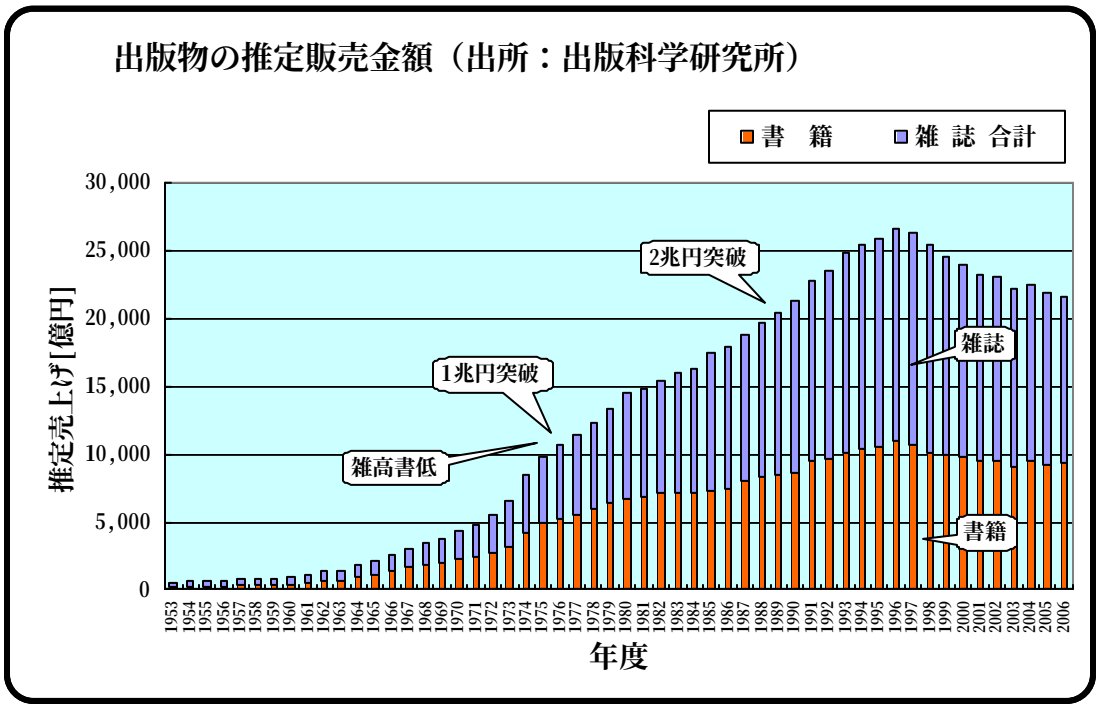
内訳は、書籍が前年比1.4%増の9,326億円。雑誌は大幅減の－4.4%の１兆2200億円。雑誌の落込みは調査史上最大限のマイナスとなった。

書籍は、『国家の品格』（新潮社、232 万部）。『ハリー・ポッターと謎のプリンス』（静山社、205 万部：78 億円）、『東京タワー』（扶桑社、200 万部）、『病気にならない生き方』（サンマーク出版、100 部）、『えんぴつで奥の細道』（ポプラ社、95 万部）、『おいでよ　どうぶつの森　かんぺきガイドブック』（エンターブレイン、85 万部）、『ダ・ヴィンッチ・コード』などが牽引力となったが、雑誌の大幅な落込みをカバーするには至らなかった。低価格の文庫や教養新書・ケータイ小説、書写本などが好調であった。

雑誌は、月刊誌が 9,523 億円、－3.9%、週刊誌が 2,677 億円、－6.5%と、中小書店の減少やＣＶＳでの販売不振、インターネットの影響などが要因と見られている。

1960 年代から 1975 年までは 2 桁成長、1976 年から 1996 年までは 1 桁成長、97 年から 6 年連続のマイナス成長となっている。

出版の推定売上が 1 兆円を突破したのが 1976 年、2 兆円を突破したのが1989年のことである。

1976 年に、雑誌の売上が書籍の売上を追い越し「雑高書低」となり、雑誌が、出版産業の成長の推進力となった。80 年代以降は「書籍 4：雑誌 6」の比率である。80 年代の 10 年間の成長率は 40.4%、90 年代の 10 年間の成長率は、わずかに 5.1%で、2006 年の推定売上は、15 年前の水準まで、落ち込んだことになる。

なお、この販売金額には、消費税は含まれておらず、推定販売部数を本体価格で換算した金額「取次出荷額－小売書店から取次への返品額＝販売額」で表示されている。